

ホトトギス

七月号

ホトトギス

昭和二十四年三月二十八日運輸省特別授受認許誌第百七号
明治三十二年十月十日第三種郵便物認可(毎月一回)一日発行
平成十六年七月一日発行(第百七卷第七号)



旬日記

汀子

平成十五年七月一日「紫苑 九百号 祝句

千号に近づくと道の紫苑濃し

七月二日 ロイヤル俳壇

山開すめば計画通りかな

滝音の遠ざかる如近づきぬ

眼前に峙つ滝として現るる

雨多きこともこの頃山開

七月五日 芦屋ホトギス会

皆濡れて着く会場の梅雨深し

花萎えてなほ百合の香の部屋とこそ

先の先までの約束扇手に

七月六日 関西野分会

表情に寝冷と告げてゐる朝餉

六甲山丸ごと呑みし雷雨かな

紅さして寝冷の顔をととのへり

七月六日 下萌句会

先の先まで力ある合歡の花

虹うすれゆるける名残の消えぬ空

雨止んで立直る花合歡の朝

虹消えて消えざるものありにけり

道をしへ気づきたるより道をしへ

七月八日 大阪倶楽部

夕立の過ぎし夜空の星仰ぐ

卓涼し花のいろいろ活けられて

六甲の朝の夏霧動き初む

夕立に追はるる如く高速路

あぢさゐの中にあぢさゐらしからず

七月八日 綿葉倶楽部

夏炉焚き山荘の日々はじまりぬ

手の放つ天道虫の行方かな

山荘に欠かせぬものに夏炉かな

夏炉焚くだけのもてなし山の荘

七月十日 清交社

印を押す手許涼しく見られけり

みちのくの涼しき旅となりぬべし

その人に似合ふ涼しき色と見し

山路抜け滝音抜けをりにけり

一言に涼しき笑顔生れにけり

船下り見逃してゐし滝もあり

七月十一日 工業倶楽部

模様替少しして夏館かな

みちのくの旅梅雨晴を信じけり

客のある日よりととのふ夏館

道をしへ始めたるより道をしへ

七月十二日 東北ホトギス俳句大会前日句会

みちのくの網戸の風に旅装解く

やはらかき緑に触れし旅心

七月十三日 東北ホトギス俳句大会

歩き来し汗湖風に消されつつ

遠回りしてゐることに気づく汗

吹き渡る緑の風が歩を誘ふ

七月十五日 有恒倶楽部

雨がちに雨がちに花終へし合歡

今日も又昼寝の刻を逃しけり

金魚減りあけしに気づきし朝かな

夕立を抜けて着陸態勢

夕立の過ぎゆく風の渡りけり

又すぐに金魚飼ひたくなつてをり

涼しさや火星近づくてふ話題

七月十五日 無名会

みちのくに扇放せぬ旅となる

雷鳴に覚めてふたたび旅寝かな

安全な場所より出でずはたゝがみ

星を見る計画に乗る涼しさを

その日より遠雷も聞き逃さざる

梅雨の旅みちのくだけが晴れてをり

七月十六日 夏潮句会

冷奴より箸下ろす一人の餉

計画の動きはじめし五月晴

白靴の行動範囲知られけり

息抜けぬ仕事山の山を崩す夏

星を見る計画の秋近づけて

茂る庭には風通してふ手入れ

水中花水に沈まぬ一とこ

七月十八日 時雨句会

野牡丹の紫こぼれたる静寂

弔問に丹きそびれたる落し文

野牡丹の色を深りし夕べかな

星空の見ゆる日はいつ秋近し

青田去る单身赴任解かれしと

ひとことと言へぬ紫野牡丹に

七月二十日 野分会

寝冷せしゆ糸の不機嫌見逃さず

スケジュールには組まれざる寝冷かな

雷神にとち込められし所在かな

七月二十四日 きさらぎ会

富士抜けてここに集まる泉かな

雨多き溪音となる夏の山

夏山といへど油断の出来ぬ旅

梅雨明の待たる旅の旬日に

七月二十六日 東海ホトギス同人会

富士見えぬ汗の運転つゞきをり

高きこと纏ふ涼しさありにけり

汗引いて行ける高さに景展け

団扇など借りて五分のロープウェイ

七月二十六日 東海ホトギス俳句大会前日句会

初対面汗の仲間でありしかな

七月二十七日 東海ホトギス俳句大会

ナビゲーターセット涼しき家路かな

母 校

稲畑汀子

年末が近づいて来ると母校の小林聖心女子学院から私に電話がかかって来るのが恒例になって、もう何年になるだろうか。

高校三年生が間もなく卒業する時期になるとそれぞれ進路が違う生徒のために特別授業を計画して進路の決まった生徒たちに授業をすることになっている。私はそれらの生徒たちに俳句の話をしたり、私が昔寄宿生として経験したことなどを話して来たのであった。

「稲畑先生がお忙しいことは承知しておりますが、何とかお引受け頂きたいのです」

高三の受持ちの先生から今年も電話がかかって来た。私は少し口ごもりながらそれでも

「分かりました。卒業するときフレンドマザー・マイヤーが、聖心で学んだ卒業生は人から何か頼まれたらイエスと言って出来る限り努力しなくてはなりません。と仰つたので……、私はお断りするのが下手なのです。でも聖心のためならば何とか時間をやり繰りしてお引受けしなければ」

「先生よろしくお願いします。生徒たちも喜びます」

「いいお話が出来るかどうか。承知致しました」

今年こそ忙しいからお断りしなければと思つていたのに、又お引受けしてしまつたと少しがっかりしながら受話器を置いた。

でも、若い生徒たちに昔の聖心の話をしたり、俳句の話をするのが何となく楽しみになって来た。それに去年から二回目には虚子記念文学館まで生徒たちや先生が来て下さることになって、今年もそのようなスケジュールを立てて頂けた。記念館では展示してあるものの説明をしながら授業をすることになる。一月に一度目の授業は聖心の教室で、二月に入って早々に二度目の授業を記念館ですることですスケジュールが決まつた。

「今年の生徒達はとても素直で明るいのですよ」

私を教室へ案内しながら受持の児玉先生が生徒たちのことを話して下さる。

「でも少々騒がしいかも知れません。昔のようにお喋りを禁じていないので」

と心配されるので、私は

「ご心配なく。この間の芦屋市の成人式で私語の多い若者たちに話をして来たばかりなのですよ」

と答えた。

教室に入ると生徒たちは一斉に立ち上がつて私を見た。

「皆さん、おはようございます」

一斉にお辞儀をして

「おはようございます」

静かに笑顔を向けながら挨拶が返って来る。何ともお行儀が良い。児玉先生が私のことを紹介して下さい。

「皆さん、お座り下さい。私は貴方がたの先輩になります。小林聖心女子学院の二十一回生です」

児玉先生がそれを受けて

「この生徒たちは七十六回生になります」

頭の中の計算機がびびくりしたように動いた。

「わあ、では五十五年も皆さんは若いんですね」

「はあ」

しばらく現実には年の差が結びつかないような気持ちになりながら五十五年という歳月の隔たりを思った。

「え？ 愛ちゃん、もう高校二年生なの？ じゃあもうすぐ高三で卒業じゃあないの」

「そうよ、おばあちゃん」

ふっと、今年の正月に帰って来た廣太郎一家との会話が頭に甦った。

この教室に並んでいる生徒たちと孫の愛子は殆ど同年代なのである。急に目の前の生徒たちが幼い感じに思えて、それならばそれなりに分り易く話を進めて行かなければと気を入れ替えて授業を始めることにした。

「……先日は二度に渡って私達のために貴重なお時間を割いて下さり、有難うございました。卒業を目前に控えたこの時期に、通常の教科書から学ぶ授業では学べない、とても貴重なお話をたくさん伺わせていただくことができました。虚子記念文学館は一步足を踏み入れると、俳句の世界が広がっており、まだまだ見学する時間が欲しいとさえ思いました。お庭に飾られている数々の俳句や、沢山のエピソードが詰まった展示物、俳句や文学に関する文献は、大変興味深いものばかりでした。また、館内のドアには『ホトトギス』の文字がデザインされていて、細やかなこだわりと遊び心のゆとりの世界を感じました。……中略……」

丁寧なお礼状を読み進むにつれて行き届いた文章の運びに感心する。

「……先生には、文学的なことに留まらず、先輩として聖心生としての生き方についてもお言葉を頂きました。『勉強することとは幾つになっても良いこと。けれど、若い内にすることは大切』というお話は、大学に進む私達にとり、身が引き締まるお話であったと思います。進学して学べることの幸せを感じながら、常に好奇心を持って何事にも貪欲に関わっていききたいと思えました。それに、日本に生まれてきたからには、美しい日本語を大事にして味わっていききたいです。……中略……」

勉強は一生のどの時期にしてもいいと思う。でも若い時に覚え

ることは何時までも忘れないけど、我々の年になってから覚えるのはなかなか大変だから、若い時間を大切にしてしっかり学んで欲しいと言ったことを思い出した。それを彼女たちがしっかり受け止めてくれているのを知って嬉しかった。

「…… 小林聖心女子学院高等学校三年一同 代表 古川愛」

目覚ましを何度も止める冬の朝

あなた見てわたしのほつぺ雪苺

弁当に残ったごまめを入れる母

このような俳句を発表しては皆で批評した授業のお礼の手紙を読みながら、今年も心にかかっていた母校の授業を何とか無事に終えた満足感と解放感が胸に広がって行った。

廣太郎句帳

廣太郎

平成十五年七月二日 一水会

大茅の輪掛けて末社でありにけり
海霧予報忙し海洋氣象台
噴水のワルツトレモロスケルツォ

七月三日 蕉心会

虹の立つごときサイクルヒットかな
七月やそろそろ希望持つとせん
百合の香といふ故郷の玄関に
黒雲と鬩ぎ合ひたる五月晴
辛うじて金魚と判る濁りかな
向日葵や芭蕉稲荷に背を向けて

七月十日 土筆会

浜木綿の香の軍港でありしかな
さりげなく名苑に売るラムネかな
極暑めくアルプススタンド甲子園

七月十二三日 石見ホトトギス俳句大会

合歓咲いて二年の月日引き寄せし
夏霧を押し上げてゆく視線かな

分骨を所望せし虚子塔涼し
七月二十二日 若水会

夏霧や定めの松は隠せざる
その中に雪加沈めて西の原
浮島の梅雨に躍つてをりにけり
梅雨といふ美しき山並こそ三瓶
梅雨空に連夜の六甲おろしかな

七月十五日 草木瓜会

大夕立ビルの浮んでをりにけり
その話団扇の裏でしてをりぬ
夕立晴富士赤々と聳えけり
夕立にモーターボートめくベンツ
祝はるる人夕立晴伴ひて

天の川一筆書に横たはり
その中にあの人の星天の川
七月二十六、二十七日 東海ホトトギス同人会 大会
花合歓を沈めてロープウェー行けり
梅雨雲は富士が一手に引き受けて
万緑を統べて御廟でありにけり
天女めく俳人集め松涼し

七月十七日 登高会

ビル涼し皇居の風を返しつつ
青葡萄ロマネコンティの威厳かな
青葡萄富士を背に日を弾き
エヌラルドグリーンに毛虫這ひ回り
毛虫焼くための重装備となりぬ

七月三十一日 三番町句会

まだ女恋ふ心あり落し文
青簾さりげなく掛け句座となる

雑詠 汀子選

冬入り日アフリカ天地燦然と
東村山 村松紅花

六千年の歴史の岸をとかげ這ふ
同

盗掘の子孫ら住めり冬山にかへりみて我が身愛しと著る春著
同

幸せも春も来るものそれとなく
東京 吉田小幸

辛き過去楽しき行方うらゝかや
同

盆梅の咲き紛れずに来る忌日
石川 辻口静夫

空よりの供華に風花積翠忌
同

分身と思ふ師の句碑路の藁
同

土のどこにありし紫クロッカス
東京 今井千鶴子

麦踏やひとりの埃ひとり立て
同

近き島濃く遠き島霞みつつ
同

雪卸だけが動いてゐる都心
同

固さとは冬芽育むものとして
稲畑廣太郎

成人の日より禁煙せし女
同

治聾酒の句は鬼城にも青畝にも
同

治聾酒の効き目疑ひつゝうまし
同

明るさは金明竹の竹の秋
同

どこかが黄どこかが白く莖立てる
京都 粟津松彩子

莖立も大気もほうけをりにけり
同

シヤガールのパイリオン弾き春炬燃ゆ
同

香具師たちも花の雨とは急がざる
東京 坊城俊樹

魚塚も鳥塚もあり鳥雲に
同

芽柳の下に下谷の老と吾と
同

夜雨はげし春雷いよよ駆くるなり
福岡 松尾緑富

晴れるてふ期待外れや霾れる
同

すみれ咲く狭庭の天地こよなくも
同

帰り咲く花の浜田に帰り来し
福山 竹下陶子

帰り花ふるさと人の心とも
同

秋薔薇の白を傘寿のわが胸に
同

不可思議の世相を嘆き去年今年
龍野 浅井青陽子

知床の浪の花をも思ひ出に
同

着ぶくれを殊にきらひし妻あらず
同

鎌倉も虚子も身近に実朝忌
京都 安原 葉

偲ばるる景も吉野の花朧
同

来すぎしか朧おぼろの京の路地
同

決断は静かなるもの梅匂ふ
豊中 滝 青佳

何もかも見えて見えざる朧かな
同

一と仕事春眠をして二た仕事
同

室咲の機嫌よき鉢悪しき鉢
神戸 山田弘子

丹波より雪の匂ひの水菜かな
同

ひとすぢの道古ぶなし鳴雪忌
同

雑詠句評（六月号より）

見ながら母上を恋う作者の心情が伝わって来る句である。

（汀子）

煤払すれば思ひ出逃げさうな 神戸 山田弘子

新年を気持よく迎えるために年の暮の或る日、主に家の中の物を普段は掃除しない物まで細かく念入りに煤ほこりを払い掃除をしていた。そしてある物品にぶつかり煤払いすることになった。

それは自分にとつて特に高価な物とかというものではなく思い出のある特別に懐かしいものであった。それを余りにも丁寧に隅から隅まで煤を払い掃除してしまうと、その思い出懐かしさまでも消えてなくなってしまうのではないかとふと思つた。そのような一瞬の心の流れを詠つた句である。現在只今を詠うということも俳句の一要素である。下五の「逃げさうな」がよい。（二歩）

新しい年を迎えるために、一年中の煤や埃を払つたり掃除をして家中をきれいにする。掃除をしなごら思い出のものが出て来ると懐かしんでしまうので中々抄らない。煤払いをしているうちに何か思い出がにげそうに思う作者の心情の推移に共感を覚える。

思い出を残して置きたい夫恋の句である。（汀子）

柿落葉わがため植ゑし母偲ぶ 龍野 浅井青陽子

多彩な色で美しい柿落葉。毎年この季節になるとこの美しい光景が見られる。これは亡き母が私のために植えて下さつたものと聞いている。

作者は明治四十二年のお生れの由、その木も老大木になつていくことであろう。ご自身お年を召されながら尚ご母堂を偲ばれる心情を「柿落葉」という季題を得て見事に表現されたと言つてよい。（小木菟）

母上が自分のために植えた柿の木がある。それは作者が生まれた記念に植えた苗木だったのかも知れない。毎年すくすく成長する柿の木を見ながら我が子の成長を楽しみにして来られた母上の心が柿の木に込められているのであろう。美しい艶のある落葉を

若水集

廣太郎選

霾・雉

人間の作る国境霾れり 滋賀 小田島美紀子
 霾や土の世界の輪廻とも 同
 大笑ひして口中の黄沙かな 同
 この街に照準合はす黄沙かな 千葉 大地音生
 待った無き育児の日々に黄沙降る 同
 霾と聞きし朝の授乳かな 同
 万丈の天渡りくる黄沙かな 半田 富田楓子
 雉翔ちて杉の静寂を破りたる 同
 万博の丘に雉鳴く日暮れどき 同
 黄沙降る我が青春の大連よ 鹿児島 石川星水女
 霾や部屋につり干す襦袢など 同
 引揚げを待ちしあの日も霾れり 同
 余生みな雉の飼育に捧ぐ雉兎 昭島 松尾康乃
 雉兎の目の一途や雉を語るとき 同
 手塩かく雄剥製にしたる雉兎 同
 霾天を背負ひ唐土に生くる民 神戸 藤浦昭代
 半球を越ゆる勢の霾とこそ 同
 霾自由宇宙の塵となりゆけり 同

夫呼べは雉は鋼の声返す 龍野 山田弘子
 雉鳴いて但馬に古りし年尾句碑 同
 雉の彩走りしあとの草の揺れ 同
 霾やたちまち現れ着くフェリー 弘前 井芹眞一郎
 霾や島を省略してをりし 同
 雉鳴いて独りごころの募りたる 同
 播磨路の山河にけふも霾れる 広島 浅井青陽子
 つつとコース過ぎりし雉のあり 同
 裏庭は山麓つゞき雉高音 同
 生涯に虜囚の日あり霾れる 高松 窪田日草男
 雉子鳴くや名もなき山の深きより 同
 難聴の耳が捉へし雉子の声 同
 霾や古き映画のやうな街 大阪 佐土井智津子
 霾や遙かな国の騎馬の音 同
 霾やイワンの馬鹿が畑にをり 同
 霾に堤防ぎはの家嘆く 神戸 山口博
 清流の濁らんばかり霾れる 同
 駆け去りし雉の彩り野に残る 同
 大陸の空に余りし黄沙かな 愛媛 湯川雅
 陸の風海の風乗り継いで霾 同
 嘴の先より雉の振り向きぬ 同
 霾や目をしばしばと牧の牛 唐津 石川多歌司
 水郷の軋む艫音や霾れる 同
 島を消し鮎を消し湖霾れる 同

若水集句評+α 廣太郎

霾や土の世界の輪廻とも 藤沢 小田島美紀子

遙か黄河流域などから飛んで来る「霾」である。筆者が一度この黄河流域を旅した時、地元ガイドさんが「春にはうちの砂が日本にお邪魔します」と洒落た事を言っていた記憶があるが、この句もまるで生き物のような雰囲気を漂わせており、生命観溢れる季題の姿として見事に捉えている。

雉子鳴くや名もなき山の深きより 金沢 窪田日草男

今回の兼題「雉」は結構いろいろな山で見掛ける事が多いのではないだろうか。筆者も六甲山で、車の前を闊歩しているところを見た。一万円札の裏にも印刷されている国鳥として無事繁殖しているのだろうか。「名もなき山の深きより」という表現が、より身近な季題として捉えられている。

霾や古き映画のやうな街 大阪 佐土井智津子

筆者は東京に来てからはあまり「霾」を意識した事はなく、や

はりどちらかという和西日本に多いのではないだろうか。関西も結構この時期街が霾で黄色くなるが、九州はその比ではなかった記憶がある。「古き映画」とは正に言い得て妙である。

驚かず飛ばず雉子は草の中 東京 今井肖子

前掲句で、車の前を闊歩する雉の事を述べたが、その時はいくらかラクシオンを鳴らそうがエンジンをつかそうが、雉は悠然として退く気配がなかったのを思い出す。図太いというか、雉子のそんな生態が的確に表現されている。

霾や憲法九条どこへゆく 東京 岩村恵子

一見して、イラクへ派遣された自衛隊員を心に描いておられる作者なのであろう。重い題材ではあるが、実際「霾」を見た時の心持が見て取れる。黄河流域からの霾が御馴染みであるが、砂漠地帯の荒涼としたイメージを重ね合わせる事により読者にも考えさせるものがあるだろう。

国道の音をはるかに雉の森 柏 渡辺彰子

深い山の中、というわけでもないが道路からはかなり離れた場所なのである。その微妙な距離感が、人間と自然との距離感をも暗示しているような句である。又「雉」の生活圏内と人間との距離感も表されていて微妙な中に季題が的確に見て取れる。